

『農民』報と孫伏園

加藤 三由紀

はじめに

一九二五年から三八年まで、中国で農民を読者とした新聞『農民』が発行されていた。農村部では大半の人が文字とかかわりなく生きていた時代である。しかもフリーペーパーではなく、安価ではあるが購読料をとっていた。民国期鄉村教育の研究が進む近年、この新聞はこう評価されている。

内容は農業知識を中心に、小説や小話、なぞなぞ、しゃれ、漫画もあり、いきいきとした紙面だった。平教会が『農民報』（論者注：『農民』の発行当時から呼称。以下、本稿では『農民』報と記す）を出版した目的は、「そのつど農民に適切な常識を伝える」ほかに、農民に意見を述べる場、才をのばす畑を提供することだった。だから、この新聞はいつも農民からの投稿を載せていた。投稿に当て字があり、文章の筋道があまり通っていない⁽¹⁾なくても、それは真の農民の声と要求だったのだ。（鄭大華二〇〇〇、二二七頁）

実際には、河北省定県（現在の河北省定州）で千戸あまりが購読したにすぎなかったのだが、それでも、文字を必要としない暮らしが営まれていた農村で、新聞の定期購読の習慣もその金銭的余裕もなかった農民が、この新

聞を受けいれ、投稿というかたちで新聞に参加していたのである。それはどのような過程をたどって実現したのだろうか。そして、農民は新聞に何を求めたのだろうか。

引用文中にある平教会とは、中華平民教育促進会の略称である。五四時期、独立した近代国家の基礎となる国民教育を普及させるために、新たな教育のあり方が模索されていた。平民教育 (democratic education / mass education) はその代表的なものである。ジョン・デューイの訪中を契機にデモクラシーの教育と成人への識字教育が各地で展開され、二三年、晏陽初⁽²⁾、陶行知⁽³⁾らの呼びかけで全国組織の中華平民教育促進会が結成された。晏陽初は財政の基盤固めにアメリカの華僑や財団に義捐金を求め、郷紳による村民教育が行われていた河北省定県を実験区とし、二九年に平教会本部を北京から定県に移動させ、義捐金の多くを定県につぎ込んだ。そこで得た方法を全土に広げようとしたのである。

『農民』報の背景には、この定県平民教育運動がある。晏陽初は、中国民衆の弱点は「愚(無知)」「窮(貧困)」「弱(不健康)」「私(利己主義)」という四つの病にあるとして、それぞれ文芸教育、生計教育、衛生教育、公民教育によって治療しようと考えた。ここで文芸教育の教材作成とその普及にとりくんだのが、孫伏園(一八九四―一九六六)だった。すでに、『晨报副刊』、『語絲』、『中央日報』などの編集で名を馳せていた孫伏園は、二九年にフランスへ留学し、三一年に帰国すると、晏陽初の招きに応じて定県へ赴き、文芸教育平民文学部主任をつとめた⁽⁴⁾。その仕事のひとつが『農民』報の刊行で、孫伏園は『農民』報の編集長となった。

孫伏園が平教会で活動していたこの時期、上海を中心に文芸大衆化論争、大衆語論争がおこっている。五四新文化運動以降、文言を廃して話すように書く白話文が正当な文体と一般に認知され、欧文や日本語の影響も受けながら新しい白話文が模索されていたが、それは大衆とはほど遠いところにあった。大衆にとどく書きことば、

大衆が発信できる書きことば、そして地域と階級のちがいを超えた共通語、国語をいかに創出しようかが論争のテーマであり、それは植民地化にさらされていた近代中国においては時代の要請でもあった。⁽⁵⁾ 定県での文芸教育も、自立した国民国家を築くことを最重要課題ととらえ、国語という言語共同体に参入する国民の育成を任務としており、国語統一準備協会系の人びとによる共通語創出運動に位置づけられる。⁽⁶⁾

国民の育成という目標が、知識人を農村へ向かわせた。定県実験区のただ中にいた孫伏園が書き残した文章には、知識人の働きかけに始まる農民との往還運動が描かれている。『農民』報普及の過程をたどることは、知識人（識字層）と大衆（非識字層）という異なる文化集団のコミュニケーションを跡づけることでもある。そこに、民国時期のことばのとらえ方について、知識人層の発想の枠を超えた何かが見えはしないだろうか。

以下、『農民』報の購読者層を生み出したコミュニティの創造とリテラシー能力の開発についてまとめたい。『農民』報普及のプロセスをたどっていききたい。ただし、現在、『農民』報は一部しか見られないようである。本稿では、北京の国家図書館所蔵分の『農民』報によった。

— 新しいコミュニティの創造へ——調査、実験と、民衆のネットワーク作り

当時、定県へは、北京から平漢鐵路で順調ならば半日から一日の行程だった。人口四十数万人、その八五%が農村部に居住していた。見渡す限りの平原に川が二本、穀物と綿花の栽培が主要産業で、交通の要所という地の利をいかした綿業が盛んであったが、土地は肥沃とはいえず、しばしば水害や干害にみまわれ、政治的にも軍閥と日本軍の脅威にさらされていた。この地に、陳筑山（法学）、傅葆琛（農村教育学）、李景漢（社会学）、瞿菊農

(哲学、教育学)、熊佛西(文学)ら、アメリカで博士もしくは修士の学位を取得して帰国し、研究教育の場で活躍していた人びとが集まり、「博士下郷(博士、村へ入る)」と注目をあびた。晏陽初は、運動総体の青写真を示し財政と対外活動を担い実際の活動を保障して、現地での人材育成をはかった。多岐にわたる農村教育の現場指揮はエキスパートたちが担い、調査研究に基づき方策をたて、社会、学校、家庭という三つの現場で実験し、より実効性のあるものに練り上げるという実践がなされていた。⁽⁷⁾

社会調査記録として評価の高い『定県社会概況調査』(中華平民教育促進会一九三三年)をまとめた李景漢は、二〇年代後半から定県に入っていた。孫伏園は李を、いれば「幽默(ユーモア)」たっぷり、いなければ「黙」の人という。その馬術はなかなかのもの、ともに出発しても遙かさきに行つてしまい、「黙」という字が表すのは、声が聞こえないだけでなく、姿も見えないということだ。⁽⁸⁾「南方出身で馬が苦手な孫伏園の目に映つたフィールドワーカーの姿だ。その李景漢はじめはシラミに眠れぬ夜を送つたという(鄭大華二〇〇〇、五四二頁)。

学校教育に尽力した瞿菊農は、「この十年で得たものは、あるやり方が成功したという経験ではなく、失敗の過程から得られた経験だ」と言い、平民学校の生徒の次のようなことばに「真の教育方法論」を見る。「先生が人工呼吸を教えるのなら、教室でやつてもいいけれど、大量選種とかいうのを教えるのなら、今は収穫の時でもないし、やりようがない。哈個不占(原注:「これではいけない」という意味、定県の俗語)。収穫の時に教えるといいです。」⁽⁹⁾また、瞿菊農は、二七年から三四年までに三万六一七九人を対象に行つた調査報告書『定県平民教育測驗統計報告』をとりあげ、文字学習定着度に男女の差がなく、年齢も三〇歳までは学習能力も定着度も高いという結果に、成人教育を標榜する平民運動が科学的な根拠を得たと喜びを表している。⁽¹⁰⁾

招聘された「博士」たちが、わずかな報酬で格段に生活環境の劣る地に根を下ろしたのは、教育による救国と⁽¹¹⁾

いう使命感もさることながら、調査に基づく実験を標榜する運動が、発見と冒険に満ちていたからだろう。

さて、当初は「愚」がすべての病根だと喧伝した晏陽初だったが、世界恐慌の影響が定県におよぶにつれ、運動の重点を、生計教育と県政改革へ移した。それは新しいコミュニティの創造へとつながる。平教会の規模も三四年には有給スタッフ二三三人、無給スタッフ千人になっていた（晏陽初一九三五、五〇八頁）。

コミュニティの基礎となる民衆のネットワーク作りに貢献したのが同学会である。平教会は平民学校や村の学校の卒業生を集めて同学会という同窓会組織を作り、社会における教育の場とした。三四年には、一三八の村に六九八三人の会員がおり、ヘロイン撲滅運動、賭博禁止運動、村のインフラ整備、抗日運動などの中核となった（晏陽初、陳筑山一九三七、二四四頁）。文芸教育では、熊佛西が率いる演劇部が、農民自身の自発的な演劇活動を促進するため、同学会演劇団を指導した。三四年には、正月公演のために一一の同学会演劇団を指導し、農民俳優一八〇人を訓練し、一四の村で公演を行い、一万五千人以上の農民が観劇を楽しんだ。公演では、ライトの移動によって客席を舞台に変え観客の中に俳優が入り観客も劇に参加する仕掛けを作った⁽¹²⁾。この同学会が『農民』報普及の鍵となる。

県政改革では、三三年、南京政府の支持を得て平教会の社会教育部長だった霍六丁が県長に着任した。孫伏園が「無骨な顔で胆力のある県長」という霍六丁は、隣県の村へ視察に行くにも、「ひと休みするとき、六丁がたくさんの仕事をした。彼は村人と家族のように接して彼らの苦楽を理解し、村人も彼には自分の苦楽を語ることができる⁽¹³⁾」という人物である。だが、同学会が後押しした普通選挙の実施や協同組合活動などが地元有力者との間に軋轢を生じ、霍六丁は共産党員を故意に逃がしたという嫌疑もかかって、三四年四月県長を辞任する⁽¹⁵⁾。結局、平教会が県政に影響を持つことは難しかった。現地有力者との摩擦に加えて日本軍侵攻の影が濃くなった三六

年、平教会は運動の規模を大幅に縮小し、三七年、日本軍の定県占拠によって撤退した。

二 リテラシー能力の開発——他集団に通じることばを求めて

平民学校の基本テキストは『平民千字課』で、授業時間は毎日一、二時間で四ヶ月、日常生活に必要な千字を学ぶ。定県では、教育を受ける層にあわせて、『市民千字課』や『農民千字課』⁽¹⁶⁾を編集していた。テキスト作成の基礎になる文字と語彙の収集に当たった識字ワーカーたちの十年間にわたる基礎作業の過程が、孫伏園の「大衆語はいかにして向上するのか」⁽¹⁷⁾に描かれている。大衆語とは「大多数の民衆のことば、つまり、現時点では、文盲の話しことば」という定義に始まるこの文章の概略を紹介しながら、彼らの試行錯誤を追ってみる。

十年前（一九二四年）平教会は、大衆語の語彙を収集することから作業を始めた。白話で書かれた新聞、古典劇や鼓詞、『三字経』などの印刷物に加えて、伝票、ビラ、お知らせ、帳簿、家計簿など日常生活で使われている文字から使用頻度の高い順に三四二〇字を選び、「通用字表」を作成した。それでも教えるには多すぎるので、そこからさらに頻度の高い一三〇〇字を選び、国語統一準備会の『国音字典』などを参考に、一三二〇字の「基本字表」を作成した。識字ワーカーたちは、なんとか知識階級の用語から脱し、ほんものの大衆語を書き表して、大衆に理解できる書きことばを作りだそうとした。こうして五年間努力を続けた結果、見えてきたのは、「一生の心血を注ぎつくしたが、千字で文章は作れない」⁽¹⁸⁾ということだった。また、たとえ理想的な大衆語で書き表せたとしても、そこには「国家、民族、だから、しかし」もない。村に大衆の代表が生まれて、町へ行って参政権を要求するにも、語彙が貧弱ではどれだけ苦勞するかわからない。「国家」や「民族」ということばが表す意味を伝え

るのにどれだけ手間がかかることか。こんな大衆語の教育に何の意味があるう。

識字ワーカーたちは、膨大な作業の末に次の一步を踏み出し、三二年、新たに「新民単語表」と「平民単語表」を作成することにした。「新民単語表」には、「国家、だから」などの語が入り、「平民単語表」には、「太陽、きょう」などが入る。教育を受けていない大衆は、「新民単語表」のことばが使えない。ゆえに、「新民単語表」は、言語教育の内容であり、大衆が教育を受けるための架け橋であり、大衆が教育を受けたのちに知識を伝達し、感情を表現する工具になる。こうして、定県では新民単語五百語あまりを組み込んだ『新千字課』を作った。識字教育には注音符号から入るので、注音符号がふつてあれば、平民単語の意味はすぐわかり、教える必要はない。

孫伏園はこの文章をこう締めくくる。「将来は文盲がしだいに減つて、国内の大衆は文盲ではなくなる。その時、大衆語は国語とひとつになり、⁽¹⁹⁾語彙が貧弱で文法が単純な大衆語はしだいに話す人がいなくなるだろう。そこまですることが、今のみな夢であり、それが達成されたときこそ、民衆教育の成功のみならず、国家全体が救われるときなのである。」孫伏園が「語彙が貧弱で文法が単純な大衆語」と言うとき、それは印象批評ではなく、次のような調査に基づいた分析だった。

村の文盲を観察すると、話すときにしばしばこのような動作（論者注：顔の表情、手の動き、声の抑揚）の助けを借りている。口で話されたものを紙に書いたのが文章だと考えるならば、いったいどうすればこのような動作を紙に書けるのだろうか、またそれにはどんな不都合があるのだろうか。本会（平教会）平民文学取材班が記録した原稿を子細に見れば、彼らが話すときに動作の助けを借りなければならぬ原因が見つかるだろう。第一に、接続詞——とはいえ、しかし、なぜならば、だから、しかれども、しかも等——が少ない。第二に、助詞——て、が、か、ね等——が少ない。こうしてみると、生徒たちに国語の文法を教えないと、彼らは

永遠にわかりやすい文章を書くことはできない。東朱谷の二つの実験学校では、二ヶ月目に接続詞と助詞の使い方を練習させた。修学満期の四ヶ月目には、センスのある生徒は筋の通った話ができるようになり、しかも、わかりやすい日記が書けるようになった。⁽²⁰⁾

声の文化である大衆語は、コミュニケーションが成立する場とともにある。文字では記録できないものを削ぎ落とした大衆語は、当然、語彙が貧弱で文法も単純にみえたであろう。識字ワーカーの目には、接続詞や助詞を必要としないコミュニケーションが、それらの欠落した表現だと映ったのである。

平民文学部門の任務には文字研究のほかに平民文学研究があり、平民が使うことばの文法構造や描写技術、文章の組み立て方、内容に表われた思想やそれを生む環境を明らかにするため、民衆芸能を取材し記録（文字化）し、『千字課』読了者のための平民読み物として出版した（晏陽初一九三五、五五〇五六頁）。孫伏園自身も平民読み物を多く執筆している。⁽²¹⁾ 声の文化に生きる農民たちの独特なことばの組み立て方を知ることとは、非識字者が生きる世界のしくみを知ることだが、村から町へ、そして国家へとつなぐためのリテラシー獲得を目標とする平民教育では、他集団に通じることば、文字化できることばが上位に置かれていた。この識字教育は成果を上げ、それまで非識字率は大まかに八割以上といわれていたが、三四年の調査で、一四歳から二五歳までの青年八万二千人のうち、非識字者は三九%となった（男性一〇%、女性七三%。晏陽初、陳筑山一九三七、二四四頁）。

三 『農民』報普及のプロセス——情報伝達から投稿の場へ

『農民』報は以上のような運動とともに変化していった。その変遷は、三つの段階に分けられる。創刊から三二年までの『農民』旬刊、三二年の『農民』週刊、休刊を挟んで三四年からの新装『農民』週刊である。

『農民』旬刊は、二四年に開かれた河北省保定平民学校で『平民千字課』を学んだ卒業生の農民を対象として、二五年三月一日に創刊された。学習内容を定着させ発展させること、ニュースを伝えることが発刊の目的である。内容は、評論、農業、衛生、公民、文芸、調査、ニュースの七項目で、『千字課』で学んだ「基本字表」の文字を使い、通用字は二割以内、記事も評論は三百字、農業、衛生、文芸などは五百字を上限とした。⁽²²⁾第一段階の時期には、同学会のネットワークはなく、識字教育でも「基本字表」を中心とする段階であった。

編集部は農民が読めるよう、次のような工夫をしてみた。創刊号では、『千字課』にない新出漢字に『農民』今日出版（音班）了」のように、近い音の漢字を注記したが、作業が煩雑なのに効果が薄く、第二期から第四期は新出漢字を列記するにとどめた。第二期には三九字の新出漢字があったが、辞書がなく教えてくれる先生もない農民にとっては、列記してあっても意味がない。第五期では、新出漢字の用例を挙げてみたが、やはり役に立たない。とうとう第七期からは何もせず、一般の刊行物と変わらなくなってしまった。第一巻第一五期からは当時の知識人好みのバタ臭い装丁にして表紙に横文字を加え、活字も小さくなった。⁽²³⁾二七年には読者はほぼ知識人層へ移っていた。当時編集長だった傅葆琛は、二周年記念号で次のように語っている。

初めて世に出たとき、私を知る人は少なく、私が行くところも多くはなかった。それから、つきあいが日増しに広がった。今では、中国の各行省各特別区、新疆、青海、西藏、蒙古、すべてに私の足跡がある。朝鮮、日本、ホノルル、南洋諸島、アメリカ、ヨーロッパにまで行っている。（中略）中国には四億の同胞がいて、そのうちの三億人あまりが字を知らない。字を知らないのは、ほとんどが村の人だ。私は北京で生まれ育ったが、村の人と友人になるのが一番うれしい。この人たちがふだん使う文字をはやく覚え、私のことばがわかるようになるよう、願っている。（『農民報的自省』『農民』二周年記念第三卷第一期一九二七年三月一日）

内容も、平教会の会報もどきになった。当時は平教会に会報がなく、それも意味があったと孫伏園は言う。こうして、『農民』報は農村問題に関心を抱く一般の知識人にむけた新聞になった。三周年記念号には、その経過をまとめる傅葆琛の文が掲載された。

『農民報』が初めて出版されたときには、もっぱら村の平民学校の生徒に読んでもらうもので、紙幅は少なく、材料も多くなく、ことばは簡単だった。だが、一般の村の平民学校の生徒は、それでも読むのが大変だった。知らない文字が多すぎたからだ。新聞の一番の目的は、ニュースを伝えることで、新しい情報を載せるには、知らない文字も削れない。しかも、各地の村の平民学校で使っている教科書がまちまちで、文字を選ぶ基準がない。また『農民報』の購読者は大半が村の読書人で、平民学校の生徒ではない。彼らはしばしば増ページと内容の拡充を求めた。（今後農民報的職責和希望）『農民』三周年記念増刊第四卷第一期一九二八年三月一日）発行部数をみると、一年目は四百、二年目に二千、三年目には四千五百部に伸びているが、内実は、当初の目的からずれていたのである。二九年五月、国恥記念日の寸評で北京当局に編集部を一時封鎖されてから、一般の時事問題については他の新聞に任せて書かないことにし、発行地を定県に移した。

その『農民』報に転機が訪れるのは、三一年、孫伏園が松年というペンネームで編集を始めてからである。孫伏園は初心にかえり、読者を農民に定め直して『農民』報の改革にとりくみ、紙名を「農民週刊」と大書して週刊にしたことをアピールした。『農民』報の第二段階である。孫伏園は農民に新聞を読む意味を語る。

農民同胞のみなさんは、平民学校で千字あまりの文字を知り、手紙が書けるようになり、帳簿がつけられるようになり、身の回りのことや家事をするのに以前よりずっと楽になっただろう。しかし、村の中でよき農民、家庭でよき息子よき娘、成長してよき夫よき妻よき親になるだけでは、責任をつくしてはいない。わが

身わが家庭をきちんとしたら、もう一步進んで、本国の大事、そして世界各地のニュースを聞くべきだ。だから新聞を読まなければならない。(松年「看報的習慣」『農民』第七卷第二〇期一九三三年二月二七日)

けれども編集部の願いは農民にとどかず、数ヶ月後には悲壮なことばが一面を埋めるようになった。

七年間、自分では編集にかなり力をつくしたと思う。深みのある文章は載せず、内容が農民の必要にそぐわなければ載せず、ここ一年は、字が小さくては農民も読みにくかろうと大きな字にした。思いつく限りのことをすべてやってみた。だが、どれだけ努力しても、定期購読家庭はいかわらず千戸ほどにすぎない。しかも、とくに言っておきたいのだが、購読料はあり得ないほど安い。県外は郵送費込みで年間たった四角、当地では一部わずか二分銅貨一枚だ。(中略)全国各地の農民のみなさん、手紙で教えてくれ、いったいどうすればあなたたちにとって必要なものになるのか。今年度下半期、本刊の記者はみな農村へ行って研究することにした。私たちはつねに農民と語り、ともに生活すべきだ。その時に私たちが書くものなら、みなさんもきっと歓迎してくれるだろう。(松年「七年的試験」『農民』第七卷第三六期一九三三年六月一八日)

停刊間際の文面には、落胆に皮肉な調子まで加わっている。

農民週刊の目的は、新聞を読み新聞を作る興味を農民に抱かせることに尽きる。ほんとうの農民週刊は農民自身が作らなければならない、今のような新聞でお茶を濁してはいけけない。一つめの理由として、本刊はすでに責任をつくした。二つめの理由として、本刊にはこれ以上発展する希望も必要もない。ゆえに本刊は、第七卷第四〇期を出したら、平教会全体の計画に照らして停刊を宣言する。(中略)みなさん自身は同学会週刊があれば読むにも書くにも便利、本刊が停刊しようとしてもその関係ない。数百人の本刊の読者については、全国各地に散らばっており、その人たちは自分で新聞を作っていないが、本刊は、やはりみなさんに

も遅かれ早かれ同学会週刊のようなものができ、自分の意見を発表し、全国各地の農民と互いに気持ちを通わせられるよう願う。(松年「看報和辦報」『農民』第七卷第三八期一九三三年七月一日)

編集部の努力は実らず、農民読者は増えず、ましてや農民自身が作り手にはなりえず、『農民』報は紙面改革一年たらずで停刊を宣言し、すでに普及していた『平校同学会週刊』⁽²⁴⁾にその役割を譲った。だが、同学会はそれを維持する財力がなく、結局は新聞事業を平教会から同学会に移管できなかった。そこで、三四年二月二日、『平校同学会週刊』の経験をいかした新装『農民』報が復刊された。この第三段階に当たる『農民』報を論者は目にしていない。『民間』⁽²⁵⁾掲載の孫伏園「十年來の農民報」⁽²⁶⁾と関連記事からその輪郭を描いてみる。

紙は洋紙から地元特産の紙に替え、印刷も鉛印から定県でできる石印とした。その広告文は「麦わらの薫りがある新聞」⁽²⁷⁾とうたう。販売も農民からの投稿収集も、同学会のネットワークを使った。発行部数はあい変わらず千部だが、すべて農民が銅銭を手に購入していく。販売価格をおさえているので、これ以上印刷すると赤字に耐えられない。千部でも、壁新聞にできるスタイルなので、実際の読者はもっと多いはずだ。毎号二枚仕立てで、一枚目には、編集部のことば、週間重大ニュース、暮らしの知恵、文芸の四篇を掲載し、漢字すべてに注音符号をつけ分かち書きにして読みやすさを確保しながら、正しい文法で書かれたお手本という意味を込めた。二枚目はすべて農民からの投稿で、当て字があっても、文字の代わりに注音符号で書いてあっても、直さずにそのまま掲載した。孫伏園はこの対応について、次のように解説する。

略字と当て字は提唱する必要は全くないものだ。民衆生活に基礎のないもので、わたしたちがその流通を望むのなら、必要なのは提唱である。民衆生活に基礎があり、上層階級の圧迫によってこれまで流通しなかったにすぎないのなら、今、わたしたちがその流通を願うとき、必要なのは放任である。略字と当て字はそれ

に当たる。略字と当て字のほか、文法や論理についても、少し変えれば原作者の意図がはっきりするとしてもあまり変えず、もしくは略字や当て字と同じように放任した。このような放任の結果、投稿が盛んになり代筆がなくなったではないか。

農閑期に編集を手伝う農民記者も誕生した。その人は編集部の書いた原稿をチェックし、同学会の文芸委員と連絡をとり、自分自身も記事を書く。こうして、『農民』報は本稿冒頭で紹介したような評価を得る新聞になった。

むすびに

農民が一定の識字術を獲得し、村に新しいネットワークができ、『平校同学会週刊』を経由して、『農民』報は生まれ変わった。この過程で編集部は方針を大きく変えた。まず、三億の農民をターゲットにするのではなく、販売対象を定県の平民学校卒業生の農民に絞った。国民の育成を担う大きなメディアをめざした編集部の企図は後景に退き、地域密着型のミニコミになったのである。次に、「正しい文」という抑圧を解いた。略字も当て字も文法の「間違い」も注音符号を文字として使うことも、編集部はそれを悪文と決めつけずに、受け入れた。⁽²⁸⁾ 文字世界の権威者という立場を降りたのである。孫伏園が使う「放任」という語には、「上層階級」の文字世界とは異なる新しいことばの誕生への期待がこめられていたのだろう。そういう発想ができる知識人集団だった。

では、農民は新聞に何を求めたのだろうか。この最も興味ある問題に答えるには資料が少なすぎる。農民の投稿は、今のところ『民間』の記事が引用する部分しか見られない。⁽²⁹⁾ 孫伏園は、女性の同学会会員が投稿した日記⁽³⁰⁾を例に引いている。注音符号はまだしも、当て字が多く読み解くのに骨が折れる文章だが、自分のことばで書くのを楽しんでいる様子が伝わってくる。農民が求めたのは、役立つ情報の入手やネットワーク維持のほか、文字世

界へのあこがれや書きことばで表現し発信することの喜びだったのだろうか。それを封印していたのは、読み書きできる文字数の多少ではなく、正しい文という抑圧だったのだろう。農民は与えられた識字術から時に逸脱しながら、書く読者として自らのことばを紡いだのである。

さて、これだけの人と財をそろえて十年の年月をかけた運動でも、知識人の声がとどいたのはわずかな範囲だった。孫伏園のもとで働いていたスタッフはこう記している。

山を動かし海を傾けるほどの力をつくして学校を開いたが、来られる生徒はぼつり、ぼつり。貧乏でも来られないし、忙しくても来られないし、貧乏でも忙しくもない者も先に恨みのある奴が入学していれば、来ようとしなない。そもそも、役人と軍人がこういった問題の解決に当たれば、簡単きわまりないのだが、平教会は官でも軍もない。平民は敬うべき、愛しむべきだ。が、個別の平民はしばしば敬うべきでも、愛しむべきでもなく、哀れむべき存在である。たとえば、病気になったら、仙薬を飲まないように勧めるだけでも大仕事だ。(中略) 信用組合ができて、平民は低利で借金できるようになった。となると、高利貸しをしていた一部の平民が平教会を洪水猛獣と見なすのも無理はない。とにかく、平民の平教会に対する抵抗は、平民の過ちではなく、愚窮弱私が悪さをしているのである。平教会が方策を考え力をつくすことは、このような悪さをするものと戦うことにほかならない。⁽³¹⁾

定県での実践が後のこの地域の発展に影響したのかしなかったのか、中国各地の郷村教育にどのようなつながったのか、本格的な実証研究はない。そして識字教育は官と軍とが主な担い手になっていった。定県で農民の投稿新聞が実現したのは、多少の財力はあっても権力がない知識人集団の使命感と冒険心が作りあげた運動だったからかもしれない。

参考文献 ○晏陽初一九三五「中華平民教育促進会定県実験工作報告」、「郷運団体概況調査」郷村工作討論会編『郷村建設実験第二集』中華書局所収○晏陽初、陳筑山一九三七「定県実験区工作概要」郷村工作討論会編『郷村建設実験第三集』中華書局所収○牧野篤一九九三『中国近代教育の思想的展開と特質』日本図書センター○大原信二一九九四『近代中国のことばと文字』東方書店○大原信二一九九七『中国の識字運動』東方書店○鄭大華二〇〇〇『民国郷村建設運動』社会科学文献出版社○小林善文二〇〇二『中国近代教育の普及と改革に関する研究』汲古書院○山本真二二〇〇二一九九三〇年代前半、河北省定県における県行政制度改革と民衆組織化の試み『歴史学研究』七六三号○苗春徳二〇〇四『中国近代郷村教育史』人民教育出版社

注

- (1) 一般紙の取材や編集では、大多数の民衆の求めに応じられない。記者の知るところ、全国で現在、平教会が出版している『農民』だけが、ひたすら農民のレベルと求めに応じた編集をしている。しかし、それは実験という性質を持つため、販売が定県に限られている（署名は（莊）「書報評論と紹介——農民週刊」「民間」第一卷第一期一九三五年二月十日）。
- (2) 一八九三年〜一九九〇年、四川生まれ。エール大学卒業後、在仏中国人労働者対象の識字運動で成果を上げ、二〇年に帰国し教育運動を展開、四九年以降はアメリカにわたり、フィリピンなどで農村開発にとりくんだ。
- (3) 陶行知は「教育に租界は開けない」と平教会から離れ、「社会即学校、生活即教育」を標語に曉荘試験郷村師範学校を開学した。小林善文二〇〇二、牧野篤一九九三参照。
- (4) 陳漱渝「中国副刊的革新者孫伏園」『魯迅研究月刊』一九九三年第二期参照。
- (5) 村田雄二郎「五四時期の国語統一論争」『転形期における中国の知識人』汲古書院一九九九年、宮尾正樹「大衆語論争における普通話の問題（一）」「お茶の水女子大学中国文学会会報」第一九号二〇〇〇年参照。
- (6) 小野忍「中国の国語運動」『中国文学雑考』大安一九六七年参照。平教会の文芸教育は、黎錦熙、錢玄同、趙元任らの国語統一準備会（一九一九年教育部の付属機関として成立、主な任務は『中国大辞典』編纂、『国音字典』修訂、国語の調査と宣伝。『国語旬刊』第一卷第一期一九二九年七月一日参照）と協力関係にあり（晏陽初一九三五、八七頁）、定県の言語調査や言語教育は『国語週刊』にもしばしば紹介されている。

- (7) 定県と晏陽初の活動の記述は本稿に挙げた参考文献と『定州市志』(中国城市出版社一九九八年)、鎌田文彦「晏陽初が推進した『定県実験』に関する考察」(『衛藤瀋吉先生古稀記念論文集二〇世紀アジアの国際関係3ナショナリズムと国家建設』原書房一九九五年所収)などによる。
- (8) 孫伏園「博野行」商金林編『孫伏園散文選集』百花文芸出版社一九九一年所収。
- (9) 瞿菊農「平民化と生産化的教育」『定県教育文録』民間出版社一九三七年所収。
- (10) 瞿菊農「文字教育的効率」『定県教育文録』民間出版社一九三七年所収。
- (11) 鄭大華二〇〇〇、五四二頁。
- (12) 陳治策「農民遊行公演話劇」『民間』第一卷第五期一九三四年七月五日、孫伏園「定県農村露天演劇」『民間』第一卷第一三期一九三四年十一月五日参照。
- (13) 注8参照。
- (14) この状況を捉えた作家に老向がいる。王向辰(老向の本名)「這一天到了」(『民間』第二卷第二三期一九三六年四月十日)は、村政府委員選挙で平民学校出身の若者が「地元有力者の妨害に負けないで学校と協同組合をつくろう」、「我らの時が来た、權利を放棄してはいけない」とアピールする様子をつづっている。また、老向「換一換年頭兒吧」(『人間世』第五期一九三四年六月四日)では、官への抵抗を「年がかわれば」という農民のことばに読み込んだ。老向は王向辰、吾如老圃という署名で『国語週刊』にも記事を多数寄せている。拙稿「民間へ飛び込んだ文学者——定県平民教育運動と老向」『野草』第七五号二〇〇五年参照。
- (15) 『定州市誌』(注7)一一六一〜一二六二頁参照。
- (16) 二八年初稿、年を追って改訂し、三一年にはほぼ完成した(晏陽初一九三五、七四頁)。堅之「介紹農民千字課」(『農民』第六卷第二六期一九三一年二月二日)によると、四分冊で、テキスト本文には、農民の日常生活に必要な知識や技能のほか、農業(生計)、文芸、公民、衛生の四大教育の基礎知識が組み込まれており、読了後は、平教会が出版していた各種平民読み物や、『農民』報へとつながるよう工夫されていた。
- (17) 「大衆語怎樣提高」『民間』第一卷第十期一九三四年九月二五日。

(18) 大原信一一九七(一五七頁、一六一頁)は、華北抗日根拠地で四〇年代に発行されていた新聞の使用文字は一五〇〇字ほど、また、千字前後を理解していれば、趙樹理編集の新聞『新大衆』が何とか読めたという。

(19) 本稿では孫伏園の国語観や大衆語論争での位置に立ち入る用意はないが、孫伏園はこの文章の初めて大衆語は「話しことばであるがゆえに地域性が強く大衆語が互いに影響しあうことはまれだ」としている。

(20) 袁戡甫「語文教学在定県の実験(続)」『国語週刊』第一三七期一九三四年五月一二日、『醒民日報』副刊「鄉村教育」週刊より転載。袁は、注音符号の教学実践も詳述し、漢字が分からないときに生徒が注音符号を使うと記述している。中鉢雅量「民国時期言文一致実現への苦闘(上)」(『名古屋外国語大学外国語学部紀要』二三)は、耳と口の訓練を重視する教育法として袁戡甫報告を紹介している。

(21) 老向「孫伏園先生」『人間世』第三四期一九三五年八月二〇日。

(22) 『定県平民教育農村運動考察記』(著者、出版社、出版年、不明。東洋学文献センター所蔵)一三六頁。

(23) 孫伏園「十年来的農民報」『民間』第二卷第二二期〜二三期一九三六年三月二五日、四月十日。

(24) 晏陽初一九三五(八三頁)では、同学会の刊行物として『農民週刊』という紙名をあげ、次のように位置づけている。
『農民週刊』の目的は、農民に世論を興させ、農民の国家民族への責任を喚起し、農民が新聞を読む能力と習慣を養い、農民に書く練習をする機会を与えることである。地元の伝統的な紙を使って印刷し、一期二枚、年額たった一元である。内容は、農民の投稿が中心で、全体の三分の二を占める。」

(25) 『民間』半月刊(北京)民間社一九三四年〜一九三七年。孫伏園、瞿菊農、熊佛西らが創刊、中国各地の鄉村建設運動を繋ぐ定期刊行物をめざした。

(26) 注23参照。

(27) 『民間』第二卷第二二期一九三六年三月二五日。広告文には、「全国の農民、民衆教育に携わっている人、農村運動に携わっている人、全国の知識階級と学者は、読まなければなりません。なぜならそれには、四つの特色——(一)農民のこゝろが紙面の半分以上、(二)農民が編集に参加、(三)定県特産の紙で印刷、(四)文体は最新のスタイル(分かち書き、注音)——と、四つの使い道——(一)テキストにできる、(二)サブテキストにできる、(三)全国農民が意見を發表す

るサービスセンターにできる、(四) 農民生活を研究する人の参考資料にできる——があるからです」とある。

- (28) 菊池久一『「識字」の構造』(勁草書房一九九五年二二六頁)は、購読者であるアーミッシュの人びとの投稿によって成り立つ新聞において、主流派社会の識字では問題にされる文法や綴りの間違いが、それほど問題にされないことを発見した民族誌学者の驚きを紹介している。「おやつと思っただけのは、投稿者が「非識字者」であるように見えたことだけでなく、この新聞を編集発行する人びとの能力を本気で疑わざるをなかったからである。しかし、何年か定期購読して分かったことは、書き手が何を言っているのかを理解できさえすれば、そのような技術的側面は気にならなくなってきた、そんなことは私の意識からほぼ完全に消えてしまったのである。…それからは、評価するためにではなく、理解するために読むようになった。」

- (29) 「書報評論と紹介——農民週刊」(注1)が引用する農民の投稿「我国的壞習慣」、「説迷信」、「早婚的害处」は、内容がいささか紋切り型で、当て字はなく文章もわかりやすい。

- (30) 注23参照。投稿は『農民』第九卷第一九期一九三五年五月六日掲載。印刷の都合上、注音符号はピンインに変えて一部をここに引く。「在五月十二日, 我們吃花生種, 有一位老太太説: 姑時候有一個老婆子上娘結, 走道半道兒的, peng 件一個老虎, 要吃他的和子。老太太説, 干回來你在吃回和子的罷。太太走了, 走道他娘結, 吃飯之後, 他哥哥告訴, 我走到半道兒 peng 見一個老虎要吃我的和子。他哥哥説, 走, 我送你起。他哥哥送到半道兒的, 也美有結老虎, 說你走吧。」(後略)

- (31) 老向「定鼎的平民教育」『人間世』第二七期一九三五年五月五日。